

KOKESHITRENDS

Free Publication September 2026

Special Issue 10



FOLK ART: ADVENTURE, ACTION, KINDNESS AND LOVE

フォークアート：冒険、アクション、優しさと愛

目次

■	ようこそ	02
■	はじめに	03
■	第1章：静かな木材から生まれた約束	05
■	第2章：命の最初のささやき	07
■	第3章：彫刻刀によって明かされるもの	10
■	第4章：息吹、彩り、そして個性	13
■	第5章：海を越えて、そして可能性の彼方へ	17
■	第6章：旅の終わり、新たな始まり	20
■	第7章：我が家と暖炉の間に落ちる影	22
■	第8章：待ち続ける日々	28
■	第9章：思いがけない翼に寄せられたメッセージ	30
■	第10章：帰るべき場所へ	32

こけしについてもっと知りたいですか？ Facebookの
@KokeshiVillageにアクセスして、Instagramの
@KokeshiTrends_ktをフォローしてください。



はじめに



これは、いつものKokeshi Trendsの発信とは少し違います。

この物語は、特別なものです。

若いこけし、アカリが盗まれたことを耳にした方もいるかもしれません。投稿を追い、搜索に協力し、そしてついに彼が見つかったとき、一緒に喜んでくださった方もいるでしょう。しかし、彼の驚くべき旅の全貌をまだご存じない方も多いかもしれません。

これからお話しするのは、行方を失った一体のこけしの物語だけではありません。それは、創造、想像、喪失、優しさ、コミュニティ、そして最後には希望についての物語です。

アカリの冒険をお話しするにあたり、私が感じたのと同じような驚きと感動を皆さんにも味わっていただけたらと思います。日本の静かな職人の工房から、予想もしなかった太平洋を越える旅へ。アカリの物語には、まるで魔法のように感じられる瞬間がたくさんあります。それは、どんなに素朴な創作にも愛情を注ぐことができ、そして時には小さな宝物が多くの人々の心に触れることがあるのだと教えてくれます。

すべての良い物語がそうであるように、この物語にも光と影の両方があります。人が見せることのできる最善と最悪を映し出しながら、人生には、私たちが予想もしないときに均衡を取り戻す、不思議な力があることも思い出させてくれます。

何よりも、これは希望の物語です。

職人、コレクター、コミュニティ、そして「灯りを守る者」と呼ばれる小さなこけしが抱いた希望。

これが、アカリ年代記です。

Madelyn Molina
Founding Editor



眠る木目

アカリの誕生は、一片の素朴な木材から始まります。職人の vision がその運命を目覚めさせるのを待っている、一本の木です。



工房は温かな光に包まれ、磨かれた道具や、杉の香りを含んだ削りくずの細いリボンに光が踊っていました。

作業台の上には木曽檜のしっかりとした木塊が置かれていました。静かで目立たない姿をしていながら、まだ見ぬ可能性を秘めていました。

Yuko先生は、緻密な木目に手を滑らせ、微笑みました。

「この木曽檜の芯から、少なくとも高さ45センチの、幅広く丈夫な体を彫らなくちゃね。そうでなければ、姉の心いっぱい重みを背負うことなんてできないもの！」

「すばらしい！」とMaddieさんが声を上げました。「髪は木に柔らかな流線を彫り込んだ髷にして、その中に望遠鏡を編み込まなくちゃ。それに銅色の糸も。エンジンから飛び散る火花みたいに光を受けられるように！」

「ああ、今のですいぶん活発な性格になったわね」とYuko先生は笑い、薄く積もったおがくずを払い落としました。「冒険好きになるのなら、服にも物語を語らせなくちゃ。胸衣の縁には真鍮のボタンを木に直接彫り込んで。そして袴は深い赤褐色に塗りましょう。」

Maddieさんは木をじっと見つめ、すでにその中に隠れている小さな弟の姿を思い描き始めていました。

「それからゴーグル」と彼女は静かに付け加えました。「ゴーグルを忘れちゃいけないわ。目は素朴で思慮深くして、まるでいつも地平線を見つめ、家に帰るまでにどんな冒険が待っているのだろうと考えているように。」

いつの間にか、Yuko先生の想像力もMaddieさんに負けないほど走り始めていました。

「始めるのが待ちきれない！」と嬉しそうに言いました。「小さな弟は、もう私の心の中で形になり始めているわ。お姉ちゃんは、やっと弟に会えたらきっと喜ぶでしょうね。」

「お姉ちゃん」という言葉を聞いた瞬間、Maddieさんの胸には強い感情が込み上げました。

数か月前、Yuko先生は愛情を込めてAyumiをこの世に生み出しました。Ayumiは魅力と温かさ、個性に満ちた、大切な存在になっていました。それでもMaddieさんの想像の中では、Ayumiはどこか満たされていないように見えることがありました。まるで、静かに誰かを待っているかのように。小さな弟。



Maddieさんが初めて、いつかAyumiにきょうだいができたらいいと話したとき、Yuko先生がその考えを受け入れてくれるだろうかと思っていました。けれど、職人の目が興奮で輝き、可能性について熱心に夢を語る姿を見たとき、Maddieさんの目には嬉し涙が浮かびました。

小さな弟には、まだ顔がありませんでした。

まだ名前もありませんでした。

彼は作業台の上に置かれた静かな木材の奥深くに、まだ隠れていました。

それでも、すでに愛されていました。
そして、そこからアカリの物語は本当の意味で始まったのです。

Ayumi

Title: A Step into the
Future (未来の一步)





職人の最初のしるし

木目の上に鉛筆を走らせ、職人の手が、やがてアカリとなる魂の最初の兆しを描きます。





Yuko先生は木曾檜の上に、最初の繊細な輪郭を鉛筆で描き始めました。かつてはただの静かな木塊だったものが、今では、これから現れようとする個性の最初の気配を宿していました。

曲線が彼の大きな体の形を示し、かすかな鉛筆線が上着と袴のひだを思わせました。小さな鼻、思慮深い口元、素朴な目が木の上に現れました。まだ洗練されてはいませんが、すでに未来への約束に満ちていました。

制作の進捗写真が届くたび、Maddieさんは一枚一枚を熱心に見つめ、新しい細部を見つけるたびに喜びました。

そして突然、息をのみました。

「髷がないわ！」

Yuko先生は温かく笑いました。

「あら、本当ね！大丈夫よ、Maddieさん。髷を付けるわ。」

Maddieさんの想像は、すでに先へ先へと走っていました。

「それから、髷の中に編み込む望遠鏡は？」

Yuko先生は考えるように微笑みました。

「あなたの願いなら、できる限りやってみましょう。」

「ありがとう、Yuko先生。小さな弟が本当に姿を現し始めたわ。」

その通りでした。

鉛筆の線を一本描くたびに、想像と現実の距離は小さくなっていきました。工房の灯りの下で会話の中だけに存在していたものが、今では木そのものの上に形を取り始めていたのです。

Yuko先生は手を止め、目の前にある素描をじっと見つめました。

「彼を『Akari o Mamoru Mono — 灯りを守る者』と呼ぶことにしたわ」と静かに言いました。

「彼は静かな決意をもって姉を導き、いつでも彼女が道を見つけられるよう助けるの。」

Maddieさんの胸はいっぱいになりました。

「美しいわ。名前が大好き。彼にぴったりね。」
初めて、木材の中に隠れていた小さな弟は、単なる彫刻以上の存在になり始めました。

第二章 生命の最初のささやき



彼には、目的ができました。
物語ができました。

そして、おそらく何より大切なことに、名前ができました。

アカリ、灯りを守る者。

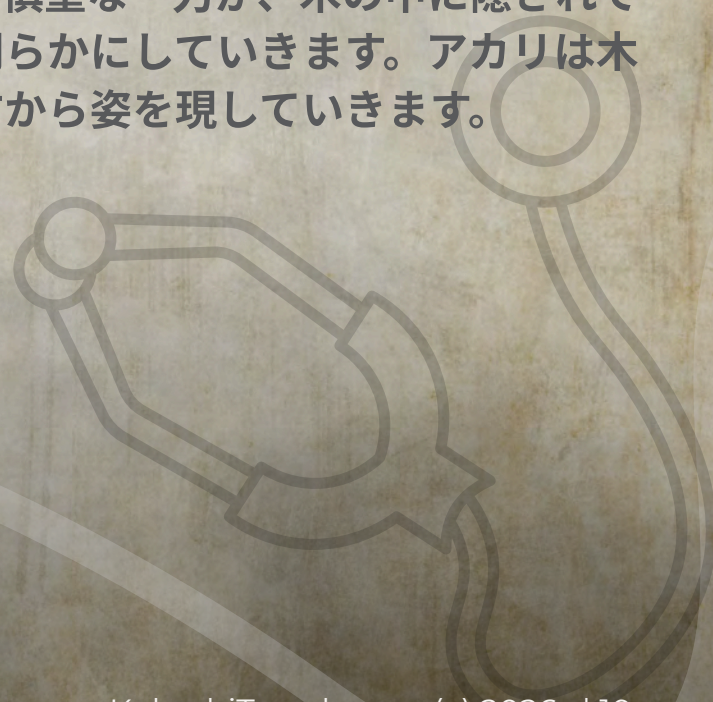
生命の最初のささやきが始まったのです。





鑿に目覚める

一つひとつの慎重な一刀が、木の中に隠されていたものを明らかにしていきます。アカリは木と想像の両方から姿を現していきます。





鑿を入れるたびに、アカリは木曾檜の芯からさらに姿を現していきました。かつて存在をほのめかしていた粗い鉛筆線は、形と奥行き、そして個性へと変わっていきました。職人とコレクターの間で交わされた一つのアイデアが、素晴らしく確かな存在になりつつありました。

ある朝、Yuko先生から新しい制作途中の写真が何枚も届きました。

Maddieさんが写真を見ると、胸が止まりそうになりました。そこに彼がいました。

ついにアカリが木の中から一步前へ出たのです。幅広い体つきがはっきりと見え、右手にはランタンを持っていました。まるで暗闇で道に迷う誰かのために、これから先を照らす準備をしているかのようでした。頭には二人が一緒に思い描いた、丁寧に彫られた髷があり、その上には大好きなゴーグルが載っていました。丸い鼻、穏やかな表情、特徴的な生え際も形になり始めていました。

しかし、Maddieさんの好奇心を最も引きつけたのは左手でした。

そこには小さな物が、しっかりと握られていました。

いったい何でしょう？

大切な記念品でしょうか？

姉のAyumiへの贈り物でしょうか？

それとも、まだ明かされていない秘密でしょうか？

Yuko先生は何も手掛かりを示しませんでした。

その代わり、謎をそのまま残しました。まるでアカリ自身が静かに答えを守っているかのようでした。Maddieさんは一枚一枚の写真を何度も見つめ、見るたびに新しい細部を発見しました。ランタン、衣服のひだ、顔の輪郭、そして、すでに自分の役目を知っているかのような自信に満ちた立ち姿。

彼女の胸は喜びでいっぱいになりました。

小さな弟は、もう木の中に隠れてはいません。彼は目覚めたのです。



それでも、彼の旅はまだ終わって
いませんでした。

日が過ぎるたびに新しい写真が届
き、Yuko先生は忍耐と細やかな
心遣い、そして愛情をもって、す
べての細部を磨き続けました。ア
カリは一刀ずつ姿を現し、職人の
道具が動くたびに、彼の物語はさ
らに豊かになっていきました。

灯りを守る者は、少しずつ自分自
身を明らかにし始めていました。
しかし、いくつかの秘密は、まだ
語られるべき時を待っているよう
でした。





色という贈り物

絵の具が木目と出会い、個性が花開く。彫られた木は、まだ語られていない物語を持つこけしへと変わっていきます。





日々、Yuko先生はアカリを唯一無二の存在にするため、細部を彫り、整える丁寧な仕事を続けました。櫥の中に隠れていた幅広い体はすっかり姿を現し、今度は、彼女が思い描いていた若き冒険者の心を仕上げるによって明らかにしていく段階へ入りました。

髷は誇らしげに頭の上に立ち、ゴーグルは生え際のすぐ上に置かれていました。これから始まる旅のために準備されているかのようです。右手にしっかりと持ったランタンは、どんなに暗い道でも照らす用意ができているようでした。

そして、左手に隠されていた謎の物体。
ついに、その秘密が明らかになりました。
それはスケルトンキーでした。
実に不思議な宝物です。

Maddieさんは写真を見つめ、それがどの鍵穴を開けるためのものなのだろうと考えました。

忘れられた時計仕掛けの金庫を開ける鍵なのでしょうか？

雲の間に隠された秘密の扉でしょうか？

それとも、勇気と冒険を通して初めて発見できる謎があることの象徴なのでしょうか。

それとも、勇気と冒険を通して初めて発見できる謎があることの象徴なのでしょうか。

彫刻が完成に近づくと、木曾櫥の木目の上に鮮やかな色が広がり始めました。

アカリの着物には淡いピンクの桜が咲き、まるで春そのものが木の中で目覚めたかのようでした。雲が優雅に流れる中、その間を精巧な歯車が回り、自然と想像力が完璧な調和で織り合わされていました。絵の具が一層重なるたびに、木が新しい生命を得て息づいているようでした。

そしてYuko先生は、さらにもう一つの驚きを見せてくれました。

彼女は360度すべてを見ることのできる写真を何枚も送ってきたのです。

Maddieさんは一枚ずつ、角度を変えながら熱心に眺めました。



正面だけでも十分に素晴らしかったのですが、背面に回った瞬間、言葉を失いました。アカリの背面プレートには、見事な羅針盤が刻まれていたのです。

それは単なる装飾ではありませんでした。旅、探検、そしていつでも故郷への道を見つけることの象徴でした。

しかし、それだけではありませんでした。

胸に斜めに掛けられ、右腕の下に収まっていたのは、旅の思いがけない相棒——何世紀も前の探検家や冒険家が携えていたものを思わせる、ポケット・フリントロック・ピストルでした。

Maddieさんは驚いて瞬きをしました。

なんという驚くべき細部でしょう！

きっとYuko先生は、アカリが旅の途中でそれを必要とするかもしれないと思ったのでしょう。結局のところ、灯りを守る者でさえ、これから先の道で困難に出会うことがあるのです。

Maddieさんがどこを見ても、驚きは続きました。

袖には、幻想的な機械仕掛けの鳥たちが、渦巻く雲とピンクの桜の間を舞っていました。真鍮を思わせる細部がデザインの上で躍動し、蒸気と想像力が隣り合って存在する世界を作り出していました。

丈夫な編み上げブーツは、遠い土地を歩き続ける準備ができているようでした。袴には、最初から話し合っていた深い赤褐色が施されていました。





そしてついに、Maddieさんが一番楽しみにしていた細部を見つけました。アカリの髷を通して、望遠鏡が編み込まれていたのです。

美しい金色と深紅に彩られた望遠鏡は、数か月前、二人が小さな弟のデザインを夢見始めたときに想像していた通り、光を受けて輝いていました。

Maddieさんは写真を何度も見返し、そのたびに新しい細部を発見しました。どの面にもこれほど多くの芸術性が織り込まれていて、言葉では十分に表現できないほどでした。

アカリは、もはや単なるこけしではありませんでした。彼は探検家になっていました。秘密の守り手。

未知の場所へ光を運ぶ案内人。

そして今の彼を見れば、一つだけ確かなことがありました。

アカリは、冒険への準備ができていたのです。





大海原を渡る

箱に抱かれ、遠い道のりを託されて、アカリは日本からアメリカへ向かう大冒険を始めます。

弟

文部大臣奨励賞受賞作家

灯りを守る者

山崎裕子作





ついに、その日が来ました。

何週間にもわたるスケッチ、彫刻、彩色、そして細部への細心の注意を経て、Yuko先生は一步下がり、自分の作品を見つめました。

アカリは完成しました。

灯りを守る者は、初めての大冒険へ出発する準備を整えました。

送り出す前に、Yuko先生は彼を生み出すときに注いだのと同じほどの心遣いと愛情を込めて、旅箱を整えました。箱には彼の名前が記され、彼女の署名と判が入っていました。それは、彼に命を吹き込んだ職人を永く記憶する証でした。ラベルには受賞歴のある職人であることが記され、箱の中には、いつかアカリが新しい家で本来の場所に飾られるための展示用ネームプレートも入っていました。

すべてが慎重に整えられました。

四隅には緩衝材が入れられました。

すべての隙間がしっかり固定されました。

Yuko先生は、これから始まる長い旅ができる限り安全なものになるよう願っていました。

しかし、最後に一つ、秘密がありました。

彼女はアカリを送ったことをMaddieさんには伝えませんでした。

サプライズで届いたほうが、もっと嬉しいに違いありません。

こうして、何の前触れも、知らせもなく、アカリの旅は静かに始まりました。

旅箱の中でぴったりと包まれ、彼は日本を出発し、大海原を越えていきました。

そんな若い冒険家の心に、どんな思いが浮かんでいたのかは、想像するしかありません。

ときどき世界が轟音を立てて揺れるのはなぜだろう、と考えたかもしれません。

トラックやベルトコンベアが彼を次の目的地へ運ぶ、穏やかな振動を感じていたかもしれません。

雲のはるか上、飛行機の中で揺れに遭遇し、それを巨大な機械仕掛けの飛行船が揺れているのだと勘違いしたかもしれません。



あるいはただ、ランタンと鍵を手に暗闇の中で辛抱強く待ち、すべての一マイルが自分の行くべき場所へ近づけてくれると信じていたのかもしれません。

結局、素晴らしい何かを待つ時間は、とても長く感じるものです。

それでも、一時間、また一時間と過ぎるたび、アカリは目的地へ近づいていきました。

やがて彼はアメリカに到着します。

やがてMaddieさんに会います。

そしてついに、初めて、彼を生み出す手助けをしてくれた姉、Ayumiと顔を合わせるのです。

冒険は始まりました。そして、地平線の向こうには家が待っていました。





家の入口へ

箱に抱かれ、遠い道のりを託されて、アカリは日本からアメリカへ向かった最初の大冒険の終わりに近づいています。



第六章 旅の終わり、新たな始まり



海を越え、税関を通り、飛行機と配送トラックで数え切れないほどの距離を移動した末、アカリはついにアメリカへ到着しました。

Yuko先生の日本の工房から始まった彼の旅は、ほとんど終わりを迎えていました。

旅箱の中で安全に包まれながら、灯りを守る者は旅のリズムが変わったことを感じていました。長い移動、突然の停止、そして旅の間ずっと続いていた遠い振動が、次第に弱くなっていきます。きっと目的地は近いのでしょう。

午前5時30分、配送トラックが静かにMaddieさんの家の前に止まりました。

運転手はアカリの荷物を慎重に玄関まで運び、そっと玄関先に置きました。

ついに、家です。

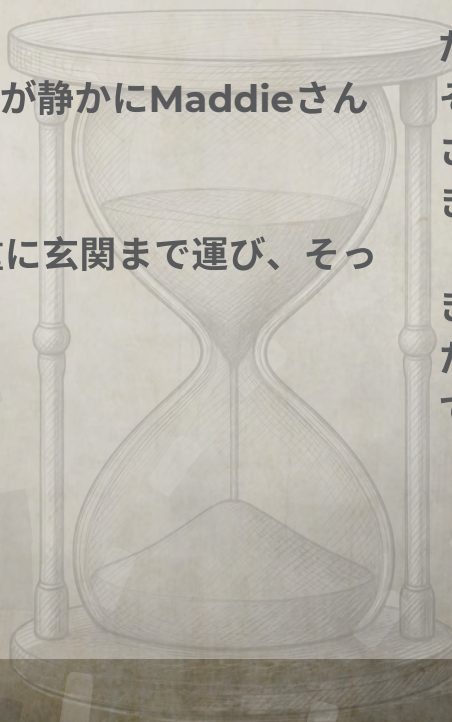
ベルを鳴らすには、まだ早すぎたのかもしれませんが。誰かを起こさないよう、運転手はトラックに戻り、次の配達へ向かいました。

しかし家の中では、誰もアカリが到着したことを知りませんでした。

Maddieさんは前日、体調がすぐれず、なかなか眠れない夜を過ごしていました。Ringのドアベルは早朝の時間帯には通知を停止しており、アラートを送り始めるのは7時を過ぎてからでした。

だから、アカリは待ちました。
そして待ちました。
さらに待ちました。
きっとここが目的地のはずです。

きっとMaddieさんもAyumiも、自分が二人に会いたいと同じくらい、会うのを楽しみにしているはずです。





影に奪われて

所属する場所まであとわずかというところで、
運命が介入し、アカリは思いもよらない章へと
消えていきます。



第七章 家と暖炉の間に落ちた影



檜の木の中から生まれたばかりの若い旅人にとって、45分は永遠のように感じられました。

朝の空気は次第に明るくなりました。
近所もゆっくりと目を覚ましていきました。
それでも、誰も来ませんでした。

そして、ついに何かが起こりました。
アカリは箱が動くのを感じました。
突然、持ち上げられました。
顔を隠し、正体の分からない影の人物が、Maddieさんの玄関先に置かれた荷物を見つけました。
そして、それを持ち去ることにしたのです。

見知らぬ人物はアカリの箱を持ち上げ、素早く歩き去りました.....
アカリは、運ばれていることをはっきりと感じました。「ああ！ やっと！」と彼は思いました。「Maddieさんが僕を見つけてくれたんだ！ ついに家に着いたんだ。」
胸は興奮でいっぱいになりました。
もうすぐ姉のAyumiに会える。
もうすぐ、海の向こうで自分を待っていた家を見ることが出来る。

もうすぐ、長い旅は終わる。

しかし時間が経つにつれ、何かがおかしいと感じ始めました。とても、おかしい。足音は続き、距離はどんどん伸びていきます。玄関のドアは決して開きません。アカリの興奮は、ゆっくりと戸惑いへ変わっていきました。

「どうしてまだ歩いているの？ 僕はもう家に着いたと思ったのに。」
灯りを守る者には、旅箱の壁の向こうを見ることができませんでした。

どこへ、誰によって運ばれているのか知ることもできません。
日本を出て以来初めて、アカリは家へ向かっていませんでした。家から遠ざかっていたのです。
そして、誰も想像していなかった、まったく別の新しい冒険が始まろうとしていました。



その頃、家の中ではRingのドアベルが動きを感知し、通知が届きました。Maddieさんの兄が通知を聞き、携帯電話を確認して、影の人物の姿を目にしました。彼はベッドから飛び起き、できるだけ急いで服を着ると外へ走り、追いかけてきました。

しかし、泥棒にはあまりにも大きな先行距離がありました。

彼は朝の中へ消えていきました。
打ちのめされ、胸を痛めながら、Maddieさんの兄は家へ戻りました。
何が起きたのかを彼女に伝える簡単な方法はありませんでした。
大切なものが盗まれたのだと説明する方法もありません。

Maddieさんは戸惑いながら聞きました。

「どの荷物？」

彼女には配達が届く予定はありませんでした。
保留中の注文もありません。
最近の購入もありません。

その朝に届くはずのものは何もありませんでした。
それでも疑問に思いながら、彼女はメール、メッセージ、配達通知を調べ始めました。
そして、恐ろしい考えが頭をよぎりました。

「いや.....いや.....いや.....まさか.....そんなこと.....？」

震える手で、彼女はYuko先生にメッセージを送りました。
数分が何時間にも感じられました。
そして、ついに返信が届き、彼女の胸は沈みました。
そう。
アカリは発送されていました。
そう。

彼は到着していました。
そして、そう。
彼はいなくなっていました。

第七章 家と暖炉の間に落ちた影



Maddieさんと兄はすぐに、泥棒が通った道をたどり、近所を手掛かりを求めて探しました。近隣の人々に話を聞き、その朝、何か変わったものを見なかったか尋ねました。

ある近所の人が防犯カメラの映像を見せてくれました。そこには、アカリの荷物を持ち、まるでピザの配達でもしているかのように何気なく家から歩き去る影の人物が映っていました。現実を否定することは、もうできませんでした。

アカリは家に到着するほんの少し手前まで来ていたのです。何週間もの期待、何か月もの創作、職人とコレクターの間で交わされた数え切れない会話。そのすべての末に、彼は消えてしまいました。

Maddieさんは涙をこらえました。

彼女とYuko先生と一緒に思い描いた小さな弟。灯りを守る者。Ayumiが待ち続けた弟。いなくなつた。すぐそこまで来ていたのに。それなのに、あまりにも遠くへ。

その朝、喜びに満ちた箱を開ける瞬間はありませんでした。再会もありませんでした。

兄と妹が初めて顔を合わせることもありませんでした。ただ、伝えなければならない辛い知らせだけが残りました。知らないうちに、アカリは家にこれほど近づいたのに、そこから何週間も戻れない場所へ行ってしまったのです。

灯りを守る者は、家の入口まで来ていました。しかし、家と暖炉の間に落ちた影が、彼を奪い去ってしまいました。

その頃、アカリの動きが突然止まりました。頭上から、何かをこするような音が聞こえました。箱の蓋の上を何かが切り進んでいます。胸が高鳴りました。ついに！

きっとMaddieさんです。きっとAyumiが迎えに来たのです。彼は二人がどんな姿なのだろうと考えました。Ayumiは弟に会えて喜んでくれるのでしょうか？ Maddieさんは、ランタンや鍵、鬚に編み込まれた望遠鏡を見て笑ってくれるのでしょうか？

蓋がゆっくり開きました。光が暗闇へ差し込みます。アカリは期待に満ちて見上げました。

第七章 家と暖炉の間に落ちた影



そこにいたのは、無表情な見知らぬ人物でした。MaddieさんでもAyumiでもありません。いったい誰なのでしょう？そして、自分が海を越えて会いに来た家族はどこにいますのでしょうか？

見知らぬ人物は慎重に彼を箱から取り出し、あらゆる角度から眺めました。話し声が聞こえましたが、アカリには言葉が分かりませんでした。現れる顔を一つずつ見つめ、何週間も想像していた人々に会えることを願いました。

どの顔も見覚えがありませんでした。どの人からも、家のような感じはしませんでした。その後の日々は、果てしなく長く感じられました。アカリは待ちました。考えました。そして、希望を持ちました。

ある朝、外へ運ばれ、テーブルの上に置かれました。一日を通して人々が行き交いました。立ち止まって彼を眺める人もいれば、Yuko先生が愛情を込めて木に刻んだ細部を手にとって確かめる人もいました。

それでもMaddieさんは現れませんでした。

Ayumiもいませんでした。きっと遅れているのだ、と彼は思いました。明日には来るかもしれない。その次の日もかもしれない。きっと、まだ来る途中なのです。

しかし日々は週へと変わりました。それでも、二人は現れませんでした。アカリはただ箱の中に座り、待っていました。自分は間違った場所へ来てしまったのでしょうか？忘れられてしまったのでしょうか？気が変わったのでしょうか？もう自分を必要としないのでしょうか？

かわいそうなアカリ。

灯りを守る者は、他者を暗闇から導くランタンを持っていました。それなのに今、自分自身が不確かな闇に囲まれていました。

そして彼は、問いと希望だけを抱え、地平線の向こうのどこかで、家がまだ自分を探しているのだという静かな信念を持って待ち続けました。





多くの心の見守り

時間は日々へと変わり、希望と不安、答えのない問いが、忘れまいとするコミュニティの中を広がっていきます。



その朝、Maddieさんが目を覚ましたとき、自分の世界が変わろうとしていることなど知る由もありませんでした。

諦めないと決意したMaddieさんは、Kokeshi VillageのFacebookコミュニティに助けを求めました。

彼女はアカリの物語を共有し、友人、コレクター、支援者たちに情報を広めてほしいと頼みました。アカリは唯一無二の存在です。もしどこかで販売されれば、誰かが気づいてくれるかもしれません。警察への届け出も行われました。ソーシャルメディアへの投稿も共有されました。コミュニティのメンバーはオンラインマーケットやコレクターのグループを探し、彼の手掛かりを待ち続けました。

反響は圧倒的でした。アカリに一度も会ったことのない人々が、彼の物語を大切に思ってくれました。世界中の人々が、彼が無事に戻ることを願いました。しかし、皆が力を尽くしても手掛かりは現れませんでした。日が過ぎ、そして週が過ぎました。沈黙は次第に重くなっていました。



その間ずっと、Yuko先生とMaddieさんは互いの悲しみを分かち合いました。二人の心から、一部分が失われたようでした。愛するアカリは、まだどこにも見つかりませんでした。

6週間が過ぎました。そして待ち続けるその季節に、もう一体のこけしが届きました。小さな妹です。Yuko先生は、アカリが日本を出発した直後から、小さな妹の制作を始めていました。アカリを失った今、その妹は希望の象徴となりました。困難な時でも、決して信じることをやめてはいけないという思いを伝える存在です。Yuko先生は彼女を「Guardian of the Key (鍵の守り手)」と名付けました。

Maddieさんは彼女をSaki (開希) と名付けました。

「Ka (開)」は「開く」を意味し、「Ki (希)」は「希望」を表します。二つを合わせた名前には、美しい意味が込められていました。「希望への扉を開く」。

Ayumiは新しい妹を喜んで迎えました。Sakiは慰めをもたらしました。笑顔をもたらしました。そして、光はまだ残っているのだと思い出させてくれました。それでも、AyumiとSakiが並んで立つその横には、空いた場所がありました。

ランタンと鍵を携えた兄のための場所です。アカリを待つ場所です。

だから、彼女たちは待ちました。
希望を持って。
見守りながら。
信じながら。
地平線の向こうのどこかで、灯りを守る者がまだ家へ帰る道を探していると信じて。



使用者が現れる

希望が最も薄れたとき、驚くべきメッセージが届き、奇跡の可能性を運んできます。

アカリが姿を消してから、長い6週間が過ぎました。検索は続いていました。コミュニティのメンバーは見守り続け、警察への届け出も行われ、ソーシャルメディアの投稿はKokeshi Villageのコミュニティをはるかに越えて広がっていました。それでも、どれだけ努力してもアカリの痕跡は見つかりませんでした。希望はまだ生きていましたが、静かになっていました。

そんなある日、一通のメッセージが届きました。Maddieさんの画面に、短い言葉が表示されました。「I seen that for sale at a yard sale. (それがヤードセールで売られているのを見た)」Maddieさんはそのメッセージを見つめました。胸がすぐに高鳴りました。「どれを見たの? 」と返信しました。もしかして、この人はアカリのことを話しているのでしょうか? メッセージは見知らぬ人物から届いていました。彼はKokeshi Villageのメンバーではありませんでした。MaddieさんのFacebookページもフォローしていませんでした。



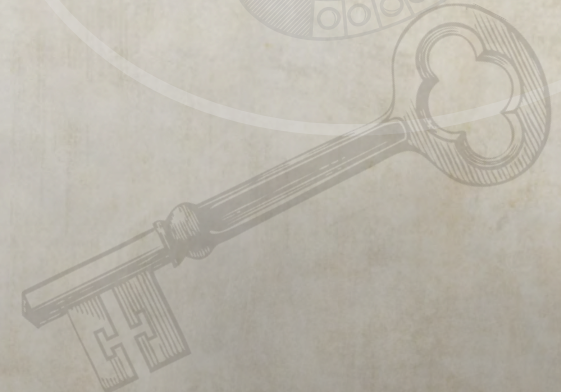
Instagramのフォロワーでもありません。
どうしてアカリのことを知ったのでしょうか？
そして、もっと重要なのは.....
本当にアカリのことを話しているのでしょうか？

時間だけがゆっくりと過ぎていきました。
Maddieさんは返信を待ちました。
返事はありません。
1時間が過ぎました。
それでも何もありません。

謎めいたメッセージは、説明も手掛かりもないまま、画面の上にただ残っていました。
本当に誰かがアカリを見たのでしょうか？
それとも、単なる思い違いでしょうか？
ほんの一瞬、希望が窓辺に鳥が舞い降りるように姿を見せました。
そして、同じくらい突然、再び飛び去ってしまいました。
沈黙が戻りました。
それでも、何かが変わっていました。
何週間もの間で初めて、可能性が生まれたのです。

ささやき。
手掛かり。
そして、アカリの物語はまだ終わっていないかもしれないという思い。
だからMaddieさんは、希望を手放しませんでした。

結局、奇跡は一度にすべてを知らせてくれるものではありません。
時には、一通の思いがけないメッセージとしてやって来るのです。





あらゆる可能性に反して、灯りを守る者は、ついに家への道を見つけようとしていました。

謎めいたヤードセールのメッセージから2週間後、Kokeshi TrendsのFacebookページに通知が届きました。
今度は違いました。

「この人形を持っています。最近購入したのですが、調べてみたところ、あなたの投稿を見つけました。あなたがこの芸術を大切にしていることを知ったので、あなたに返したいと思います。」

Maddieさんは画面を見つめました。
手が震え始めました。

今度こそ本当なのでしょうか？

彼女はしばらくその場に座ったまま、あまり期待しすぎるのが怖くて、希望を抑えていました。これまでも希望を打ち碎かれたことがあったからです。

深呼吸をして、彼女は慎重に返信を入力しました。

アカリの帰還

あらゆる困難を乗り越え、アカリの旅は一周し、彼はずっと帰るべきだった場所へ戻る道を見つけようとしていました。



「こんにちは。ご連絡ありがとうございます。先へ進む前に、人形の写真と、いくらで購入されたのかを教えてくださいいただけますか？ 同じ作品であることを確認できましたら、代金をお返しし、安全に返却していただけるよう手配したいと思います。」

そして、彼女は別のことに気づきました。送信者は、まったく同じ町に住んでいたのです。

何百マイルも離れた場所ではありません。

別の州でもありません。

近く。

とても近くです。

待つ時間が始まりました。

数分が何時間にも感じられました。

そして返信が届きました。

添付されていたのは、一枚の写真でした。

アカリの写真です！

世界が止まったようでした。

そこに彼がいました.....
彼のランタン。
彼のゴーグル。
彼の羅針盤。
望遠鏡の付いた髷。
灯りを守る者が見つかったのです。

約8週間にわたる不確かな日々は、言葉では到底表しきれない感情の洪水へと一気に変わりました。喜び、安堵、感謝、信じられない思い、そして希望。そのすべてが一度に押し寄せました。



生存の証



水曜日、8月5日でした。Maddieさんはすぐに、週末に会うことができるか尋ねました。平日の仕事を邪魔したくなかったので、土曜日のほうが都合がよいだろうと考えたのです。

彼は快く同意しました。

人目のある公共の場所が選ばれました。

日程が決まりました。

8月8日、土曜日に会うことになりました。

3日後です。

とても長い3日間です。

それでもMaddieさんは慎重でした。

すぐにはYuko先生に伝えませんでした。

もし何か問題が起きたら？

もし男性が気持ちを変えたら？

良い知らせを伝えたのに、もう一度Yuko先生の心を傷つけることになったら？

失望するかもしれないという可能性が、彼女の心に重くのしかかっていたいました。

それでも心の奥では、希望が少しずつ大きくなっていました。見ず知らずの人の優しさが、信じられないほどに思えました。

誰かが、自分の買ったものが本来は別の場所に属していたことに気づいたのです。

誰かが、その物語を知りました。

そして誰かが、アカリを家へ帰す手助けをすることが正しいことだと決めたのです。その思いに、Maddieさんの目には涙が浮かびました。

日がゆっくり過ぎる中、彼女は会う準備をしました。男性が支払った金額と同じ現金を封筒に入れました。そして、少し多めのお金と、心からの感謝を綴ったメモも加えました。彼の正直さと優しさがどれほど大きな意味を持つのかを伝えたかったのです。

ついに土曜日が来ました。そして、あることに気づきました。アカリが盗まれたのは6月8日。ちょうど2か月後の今、Maddieさんは彼を家へ連れ帰ろうとしていました。その巡り合わせは、ほとんど魔法のようでした。兄が車を運転してくれることになりました。興奮と緊張があまりにも大きかったからです。



二人は早めに到着し、地元の店の外で待ちました。Maddieさんは行ったり来たりしながら歩きました。一分一分が、前の一分より長く感じられました。

彼女はメッセージを送りました。

「着きました。」

返信が届きました。

「向かっています。もうすぐ着きます。」

そして数分後、彼女はその男性を見ました。こちらへ歩いてくる男性。箱を持っています。

アカリの箱です。

彼女の胸は張り裂けそうなほど高鳴りました。

男性が二人のところまで来ると、Maddieさんは微笑み、静かに尋ねました。

「彼に会うために、開けてもいいですか?」。「もちろん」と男性は答えました。

彼女は慎重に箱を開けました。

そして、そこに彼がいました。

アカリ。

無事です。

欠けることなく。

ついに家へ帰るのです。

恐怖も、悲しみも、不安も、すべてが静かに溶けていきました。Maddieさんは涙で濡れた目のまま微笑み、男性に何度も何度も感謝しました。

封筒を手渡し、どこでアカリを見つけたのか尋ねました。その答えは驚くべきものでした。ヤードセール。自分の住む地域からほんの少し離れただけの場所。歩いて行ける距離でした。

男性は、日本を思わせる芸術やコレクションが好きなのだと説明しました。アカリを見つけたとき、その過去を知らずに購入したのです。その後、もっと知りたくなってインターネットで調べ、Maddieさんがアカリの盗難について詳しく説明している動画を見つけました。

真実を知った瞬間、彼は自分が何をすべきかをはっきりと理解しました。

アカリが家へ帰れるよう、連絡をしてくれたのです。Maddieさんは、彼が自分の一日だけでなく、



アカリを愛情を込めて作った職人の一日まで明るくしてくれたのだと伝えました。男性は微笑みしました。

別れの挨拶を交わし、そして家へ帰る時間になりました。車の中で、Maddieさんは膝の上にアカリの箱を抱えていました。ついに感情があふれ出しました。

目には涙がいっぱいになりました。

隣では、兄が静かに見守っていました。

そして、ただ一言、こう言いました。

「分かってるよ。家に帰れてよかった。」

帰り道は穏やかでした。もう、何も言う必要はありませんでした。

家に着くと、Maddieさんは慎重にアカリを箱から出しました。ネームプレートもまだありました。彼と一緒に、ずっと待っていたのです。彼女はAyumiとSakiが立っている場所へアカリを運びました。

そして、いつも彼がいるはずだった場所へ、そっと置きました。姉たちの隣に。家族の隣に。

彼女は静かにささやきました。2か月もの長い間空いていた場所は、もう空いていません。

「帰ってきたね。」

そして、素晴らしい知らせをYuko先生に伝えました。

嬉し涙を目に浮かべながら、MaddieさんはKokeshi Villageのコミュニティにも知らせました。

約2か月にわたり、メンバーたちはアカリの物語を追っていました。投稿を共有し、オンラインマーケットを探し、目撃情報を待ち、困難な数週間の間、励ましの言葉を届けてくれました。

誰も、実際にアカリに会ったことはありませんでした。

それでも、彼の旅を心から大切に思うようになっていました。

発表が行われると、祝福のメッセージが次々と寄せられました。コミュニティは歓喜しました。



物語のすべての章を見守ってきた友人たちは、灯りを守る者がついに見つかったという知らせを喜びました。彼が消えた悲しみを共有した心が、今度は彼の帰還の喜びの中で一つになりました。

一体のこけしを失ったことから始まった出来事は、もっと大きなものになりました。

それは、優しさ、希望、そしてコミュニティの物語になったのです。

Maddieさんが世界中から届くコメントやメッセージを読むと、アカリは決して本当の意味で一人ではなかったのだと思い知らされました。一つのコミュニティ全体が、彼が家へ帰る道を見つける手助けをしていたのです。

その後に届いたメッセージは、喜び、安堵、感謝、幸福に満ちていました。それらを読むたび、Maddieさんの心は温まりました。そして彼女は、今回の出来事を通して少しずつ形作られてきた、一つの真実に気づきました。

アカリは、決して一人の人だけのものではなかったのです。彼は、みんなのものでした。

彼を彫った職人のもの。

彼を待ち続けた姉のもの。

彼を探したコミュニティのもの。

正直さによって彼を返してくれた見知らぬ人のもの。

そして、彼がずっと帰るべきだった家のもの。

灯りを守る者は、最大の冒険を終えました。

アカリはついに家へ帰り、彼をそこへ導く手助けをした数え切れない心ほど、大きな声で喜んだものはありませんでした。





@atelier_yuko



Maddie & Yuko Yamazaki

Saki, Ayumi, Akari By Yamazaki Yuko



妹-鍵を守る者



未来の一步



灯りを守る者

クレジット：ゼイヴィア・ブラックウェル・イノベーションズによるスチームパンク動物の守護者



エピローグ

旅の中には、木塊から始まるものがあります。
夢から始まるものもあります。
アカリの旅は、その両方から始まりました。

彼は海を越え、喪失を乗り越え、コミュニティを動かし、そして物語を見守ったすべての人に、前途が不確かに見えるときでさえ、希望を手放してはいけないのだと思いつかせました。

時に、私たちが携える光は、ただ前へ進む道を照らすためだけのものではありません。

時には、その光は私たちが家へ導くためにあるのです。



年代記についての注意書き

『アカリ年代記』は、実際に起きた出来事に着想を得ています。
アカリは日本の職人によって愛情を込めて作られ、海を越えてアメリカへ渡り、到着して間もなく盗まれました。そして最終的には、正直な見知らぬ人の優しさと、思いやりあるコミュニティの支えによって、家へ帰る道を見つけました。

物語の中心となる出来事は事実ですが、物語として伝えるために一部を脚色しています。会話、登場人物の心の声、描写、場面の一部は、アカリの冒険が持つ驚きと感情を表現するために創作されています。

アカリが本当に飛行機について思いを巡らせたのか、見知らぬ人たちを静かな好奇心で見つめたのか、姉たちに会う夢を見たのかは分かりません。それでも私たちは、心の中では、きっとそうだったのだと想像したいのです。

そして perhaps、それこそが、物語を語ることの魔法が始まる場所なのかもしれません。

最後のページをめくる前に、ちょっと待って！ 今号に登場する「スチームパンク・レリックス™」のアニマルたちを、よく見てみてね。ただの可愛い仲間だと思ったら大間違い！ 実はこれ、それぞれのこけしたちが自分の秘めた力や個性（ギフト）にぴったりの「アニマルスピリット」と出会う、これからの『Chronicle』の物語に向けた大切な伏線なんだ。自分らしく生まれ変わる旅は、まだ始まったばかり！

FOLK ART: ADVENTURE, ACTION, KINDNESS AND LOVE

フォークアート：冒険、アクション、優しさ、そして愛

こけしの魔法



WWW.KOKESHITRENDS.COM

Thank You For Stopping By.

